石巻市

文化財だより（第11号）

――昭和55年度文化財調査特集
小竹浜地区の文化財――

もくじ

石巻市指定文化財について……1
石巻市教育委員会社会教育課
昭和55年度板碑分布精密調査報告……3
佐藤雄一
昭和55年度古文書分布調査報告……7
石垣宏
小竹浜地区民俗資料・民具収集調査報告……11
鈴木東行
弁天島植生調査報告……21
佐々木豊

石巻市指定文化財について

石巻市教育委員会社会教育課

石巻市教育委員会では、昭和五十六年五月十八日付けで二件、昭和五十六年十二月十九日付けで一件、合わせて三件の文化財をあらたに指定しました。内訳は、有形文化財二件（工芸品一・彫刻一）、無形民俗文化財一件（民俗芸能一）です。これによって、石巻市指定文化財は、総数十件となりました。

以下、新指定文化財三件について、概要を紹介します。

◆葛西椀

石巻市大瓜の龍洞院に伝わる葛西椀は、広く秀衡椀と言われる椀類に属している。意匠的には江戸初期を下ることはないと考えられる一連の秀衡椀は、室町末期から桃山時代にかけての作と考えられ、初期は朱漆を主としたもの、末期は他の彩漆・黄・緑などを使ったものと考えられる。

龍洞院の葛西椀は、中世の三器と言われる三重入子の椀で、材質は榉の横挽の上手のものである。この椀の十二弁の菊と洲浜、源氏雲の広がりなど、かなり簡略化され、洗練された意匠には、気負いのない手馴れが見られ、この形式のかなり円熟期のものと考えられる。また、龍胆文のついた隅切膳（現在は足が失われ、折敷状になっている。未指定）に残っている白檀塗は、桃山時代全盛期のもので、時代的に大きな差はない。

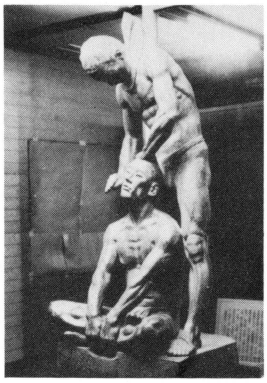
龍洞院の開山である勅賜仏照大円禅師文誉和尚は、葛西十五代晴胤の叔父であったことから、葛西氏より贈られたと言われており、葛西氏と石巻の関係を考える上で、貴重な遺品である。

なお、この椀の製作年代は、室町末期から桃山時代と推定される。

◆故高橋英吉作木彫「黒潮閑日」

「黒潮閑日」は、海を主題とする三部作のうち、一番目の作品で、昭和十三年に制作された。

高橋英吉氏は、明治四十四年四月石巻町湊本町に生まれ、昭和五年旧制石巻中学校を卒業後、東京美術学校（現在の東京芸術大学）に入学。在学中、帝展に「少女像」を初出品し入選している。のち、海を主題とする三部作に取り組み、「黒潮閑日」（昭和十三年文展入選）「潮音」（昭和十四年文展特選）「漁夫像」（昭和十五年文展無鑑査）を発表し、戦時色濃い中、真の創作活動を続け、芸術家としての名声は高まった。しかし、昭和十七年、南方派遣軍に応召。同年十一月二日、三十一歳の若さでガダルカナル島に散華した。



「黒潮閑日」は、高さ1m47cmの木彫で、漁夫が漁の合間をぬって仲間のひげを剃っている姿で、まさに閑日の漁夫二人の姿を美事に表現した作品である。

◆石巻市渡波獅子風流

渡波の獅子風流は、鎌倉時代に根岸部落を中心に発祥したと伝えられ、以来、渡波全域に拡まった長い伝統をもつ信仰行事のひとつである。

もともとは、正月および祭典に氏神、鎮守の神前で演じ、その年の農作物の害を除き、部落の安泰を祈念したものが、その後、氏神が獅子に姿を変えて部落に降り、陰暦松の内（元旦から十四日まで）に貧富の別なく戸毎に舞い廻り、家の四隅のうちにかくれ住むと言われる厄神を追い払い家内安全と五穀の豊穣、大漁満足を祈禱する行事になったと伝えられている。

演順は、しころ囃子、たんぶつ唄、四方堅め、あらし、おかざき、むすび、おくり囃子からなり、その家々の家構え、財宝、家族の健康を讃美し、待機していた獅子が、四隅を浄め、軽快に、あるいは豪壮に、そしてあらしと乱舞する。

この家のもてなしを受けた獅子は、名残りを惜しみつつ舞い納め、御縁があるならまた来春もと結ぶ。

昭和二十九年当時の三浦渡波町長が、郷土の貴重な民俗芸能文化財として、永久に保存するため、渡波獅子風流保存会を結成して、その保存に努めている。

石巻市所在指定文化財一覧

（昭和57年３月31日現在）

〈国指定文化財〉

名称	員数	指定年月日	所在地	所有者	時代
重要文化財					
岩版	1	昭和36．2．1	石巻市住吉町一丁目８－29	毛利　伸	縄文
史跡					
沼津貝塚	1	昭和47．10．21	石巻市沼津字出外		縄文～弥生

〈県指定文化財〉

名称	員数	指定年月日	所在地	所有者	時代
牡鹿法印神楽	1	昭和46．3．2	石巻市湊字牧山１－１	（代表）桜谷守雄	
仁斗田貝塚	1	昭和50．4．30	石巻市大字田代字仁斗田		縄文

〈市指定文化財〉

名称	員数	指定年月日	所在地	所有者	時代
多福院板碑群	88	昭和50．6．1	石巻市吉野町一丁目１－９	三輪宗顕	中世
平塚ツナ家文書	739	（第一次）昭和51．6．1（第二次）昭和53．4．1	石巻市大字田代字仁斗田50	平塚ツナ	近世
鳥屋神社奉納絵馬『奥州石ノ巻図』	1	昭和53．8．1	石巻市羽黒町一丁目７－１	桜谷　博	近世
旧石巻ハリストス正教会教会堂	1	昭和55．12．20	石巻市中瀬３－18	石巻市	近代
潮音	1	昭和55．12．20	石巻市羽黒町一丁目９－２	石巻市	現代
イチョウ（吉祥寺）	2	昭和55．12．20	石巻市高木字寺前49	一方井文章	
イチョウ（龍泉院）	1	昭和55．12．20	石巻市水沼字天似113	泉　孝夫	
葛西椀（龍洞院）	3	昭和56．5．18	石巻市大瓜字棚橋168	坊沢敏和	中世
黒潮閑日	1	昭和56．5．18	石巻市羽黒町一丁目９－２	石巻魚糧工業株式会社	現代
石巻市渡波獅子風流	1	昭和56．12．19	石巻市渡波町二丁目６－33	（代表）内海幸平	

昭和五十五年度板碑分布精密調査報告

石巻市文化財保護委員　佐藤雄一

1

昭和五十五年度の石巻市文化財調査の一環として行なわれた「小竹浜地区板碑分布精密調査」の報告である。中世期の造立になる板碑の確認調査であったが、一緒に近世の石碑調査も行なっている。しかし、これについては紙数の関係で、後に発表することにした。

2

調査地域・小竹浜は牡鹿半島の西端に位置し、入江前面には弁天島があり、石巻湾に面している。小竹浜に関する記録は江戸時代に入ってからの「風土記書上」等に見えるものが最初であり、それ以前の記録は確認されていない。しかし、仙台藩においては小竹浜の重要性は十分に認識されていた。すなわち、仙台藩において買米制度が実施され、石巻からの江戸廻米が盛んになると、米穀の脱石(密石)を取締る御穀改番所が設置されていたし、千石船の船頭、船員の供給地としても重要な役割を果していた。

さらには、金華山参詣のための海上道の寄港地でもあり、渡波から外海に出ての最初の港でもあった。

小竹浜に人間が住みついたのは何時ごろのことであるかもはっきりはしない。牡鹿半島の各浜で確認されている貝塚や縄文土器等の散布地もない。しかし、地元に伝わる口伝には、前九年・後三年の役ののち、源義家に従軍した家来が永住したとも、あるいは安倍氏の一族が逃れて来て、隠れ住んだともいわれている。これとても、他の文献、遺物でたしかめることはできない。

しかし、今度の石巻市文化財調査の結果、図(1)に示すような文和五（一三五六）年を最古とする板碑十六基が確認された。このことによって近世以前の様子は不明とされていた小竹浜の姿を垣間みることができることになった。

中世期の遺物とされ、それも鎌倉時代中期から安土・桃山時代にいたる、およそ三八〇年間の長い時期にわたって造立されたとする板碑の確認は、小竹浜の歴史にとって重要な意味をもつものである。

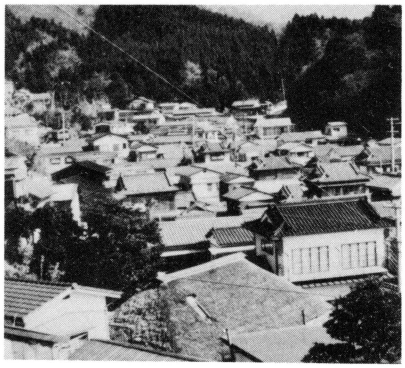
3

小竹浜板碑群の観察

(1)年代について

小竹浜板碑群の年代の上限はNo.1の文和五（一三五六）年七月四日であり、それは阿弥陀三尊種子板碑である。六二六年以前の造立ということになる。次は延文六（一三六一）年六月二十日で、釈迦如来種子板碑である。ともに北朝年号である。この他に南北朝時代の紀年銘を確認できるものは一基もなく、他のものはすべて応永三（一三九六）年から応永二十八（一四二一）年にいたるものが五基あり、更らに下って寛正年代（一四六〇～一四六五）の一基があるのみである。文和・延文の北朝年号にみられるように、石巻地方における南北朝の内乱期においては興国三年以降の南朝年号は決して用いられずに、北朝年号のみが使用されているというこれまでの調査結果が小竹浜の板碑群においても裏づけられたことになる。このことからも、小竹浜の板碑群の中に文和・延文の各一基づつではあるが、北朝年号の板碑があるということは、政治史の上からも重要なことである。すなわち、小竹浜も南北朝内乱期には確実に北朝の勢力圏内であったことを示しているものであろう。

また、文和五年は三月二十八日に延文と改元されているのであるが、小竹浜の文和の碑は七月四日の紀年である。ほぼ四か月経っても小竹浜には改元の情報が伝わらなかったことになる。このようなことは延文の碑についてもいえるようである。すなわち、延文六年は三月二十九日に康安と改元されているのであるが、この碑も六月二十三日の紀年をもつので、およそ三か月も改元の情報が伝わらなかったことになる。この三か月ないし四か月の改元情報のおくれということは、他に六か月のおくれという例も報告されているので、決してめずらしいことではない。



◀小竹浜の集落

(2)種子について

種子の種類は表(1)の通りであり、特に特徴のある表われ方はしていないと思う。その中で、特にあげるとすれば𑖮（勢至菩薩）の三基があることであろうか。

▲回向院跡

（表１）

種子	数量
阿弥陀三尊	2
勢至菩薩	3
大日如来(アーンク)	2
大日如来(ア)	1
※観音菩薩	1
※※釈迦如来	1

※勢至菩薩であるかもしれない。

※※ベイの薬師如来のようにも見えるがバクの釈迦如来であろう。

種子の彫り方は、No.8の寛正の碑のアーク（大日如来）を除いては、その彫り方は比較的浅く、碑によっては、まったく稚拙な彫り方をしているものがある。

(3)偈について

偈は次の二句になる。

ⓐ寛正の碑

諸仏念衆生　衆生不念仏

父母常念子　子不念父母

ⓑNo.11 No.12の碑

葉木国土　悉皆成仏

いづれも出典不明であるが、ⓐについては石巻地方において一基確認されているが、ⓑについては小竹浜の板碑が初見である。こんなところにも小竹浜の板碑の特性があるような気がする。

(4)総合的な観察

近世以前の小竹浜については、それを伝えるものは国家による前九年の役あるいは後三年の役後のものであった。しかし、今回の小竹浜の調査で、いままでに知られていなかった板碑が断碑も含めてではあるが、十六基も確認されたことは、小竹浜にとってのみならず、石巻地方の中世文化を考える上にも重要なことであると思う。それは小竹浜において確認された板碑の中の応永十七年碑に、かすかではあるが金箔の痕跡があり、このことはすでに岩切東光寺において確認されている板碑造立の手法が小竹浜にも伝わっているということからもわかる。年代的には南北朝時代初期がその上限であるが、ほとんどの板碑が集中的に確認されている洲土歩山回向院跡を発掘調査することができれば、鎌倉時代にまでさかのぼる可能性があるものと思われる。

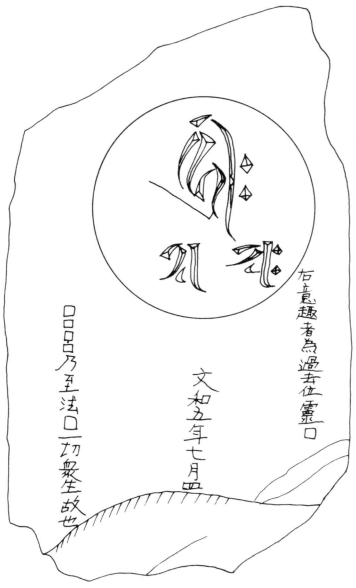
板碑の内容をよく伝えるものとしてはNo.8の寛正の碑が注目されてよいと思う。それは、板碑が卒塔婆であることを明記しており、さらに、卒塔婆であることのために、年忌供養に造立されたことをも示しているからである。例の少い偈が刻されていることも重要であり、その頂部が三角形に調整され、上部が突出していることも特記しなければならない。

4　保存についての提言

小竹浜の板碑は日枝神社裏の阿弥陀三尊碑を除いて、洲土歩山回向院跡に集中している。それも、放置されているといっていい状態である。回向院跡は現在は個人の所有地になっており、江戸時代の墓石とともに荒地のままに放置されている。小竹浜の人達はここを寺小屋跡ともいっている。回向院は、その年代をさぐる文献は見当らないが、土地の人達が寺小屋跡ということから考えると中世までさかのぼれる寺院ではないかもしれない。しかし、そこに板碑が多数存在することから、あるいは他の中世の廃寺跡である可能性もある。いずれにしても、小竹浜の回向院の解明と板碑保存の作業は、小竹浜の歴史にとって重要なことである。根本史料の役割を果す板碑は、現在の散在の状態から一刻も早く、一か所に集めて管理保存されることがのぞましい。

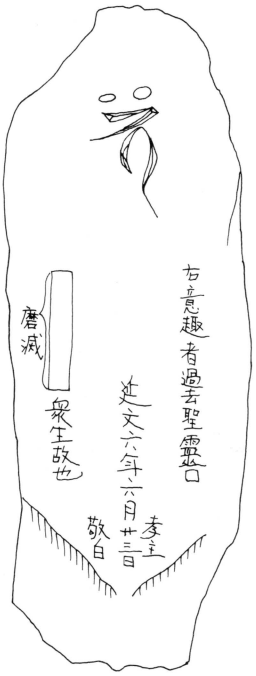
図(1)

No. 1



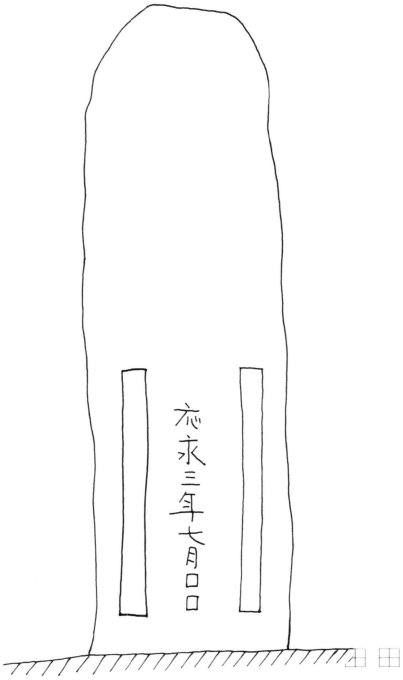
H：130cm　W：60cm
T：　7cm　粘板岩

No. 2



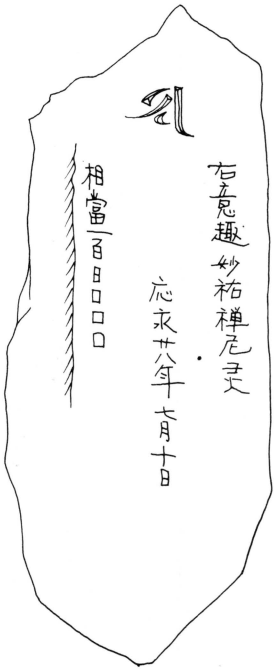
H：100cm　W：30cm
T：　7cm　粘板岩

No. 3



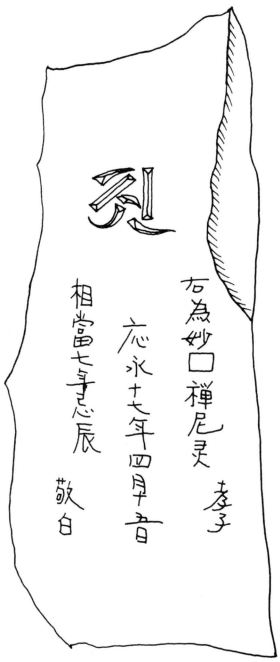
H：115cm　W：30cm
T：　15cm　粘板岩

No. 6



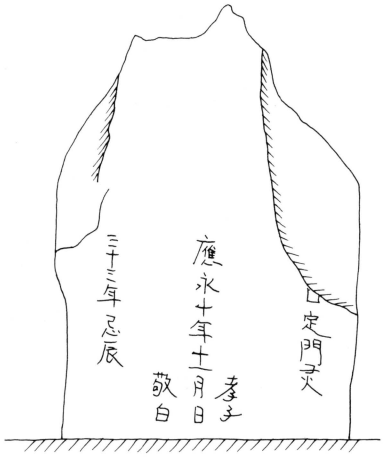
H：106cm　W：28cm
T：　6cm　粘板岩

No. 5



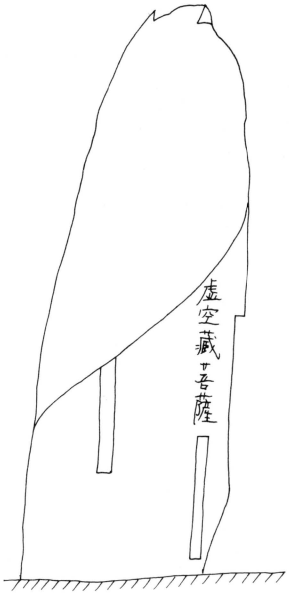
H：82cm　W：29cm
T：15cm　粘板岩

No. 4



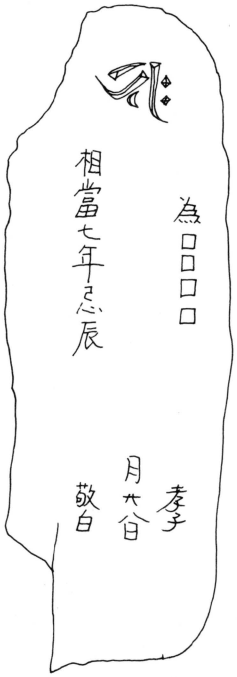
H：103cm　W：55cm
T：10cm　粘板岩

No.10



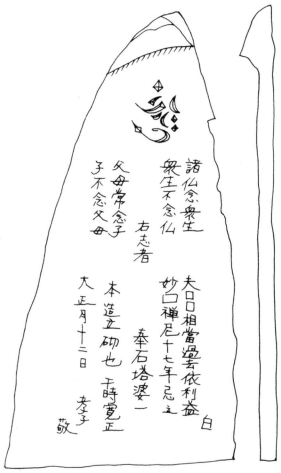
H：190cm　W：30cm
T：17cm　粘板岩

No. 9



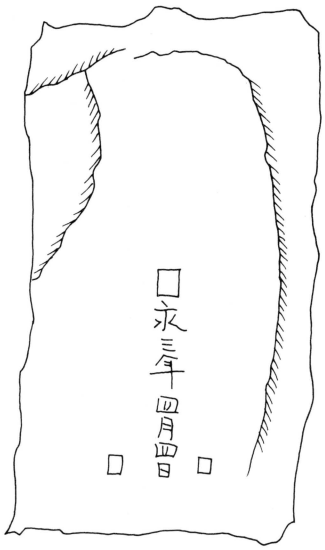
H：150cm　W：35cm
T：10cm　粘板岩

No. 8



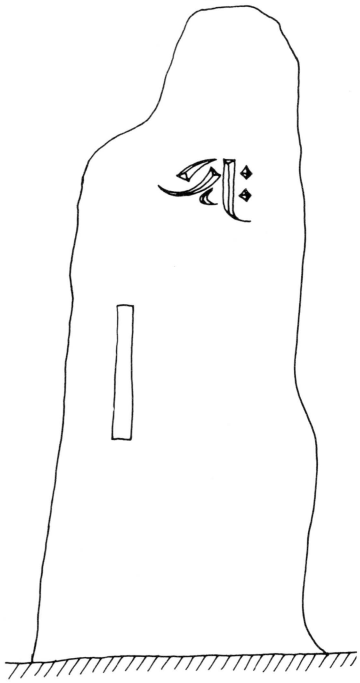
H：100cm　W：38cm
T：6cm　粘板岩

No. 7



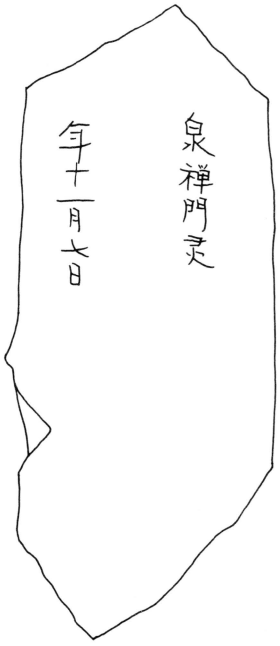
H：100cm　W：40cm
T：5cm　粘板岩

No.13



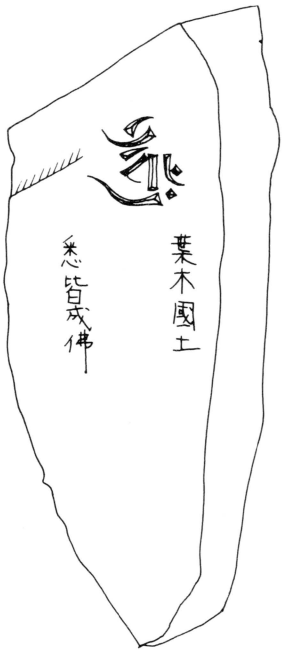
H：135cm　W：40cm
T：　7cm　粘板岩

No.12



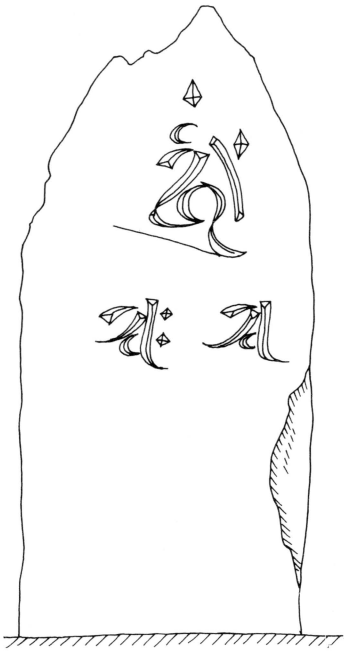
H：74cm　W：28cm
T：3.5cm　粘板岩

No.11



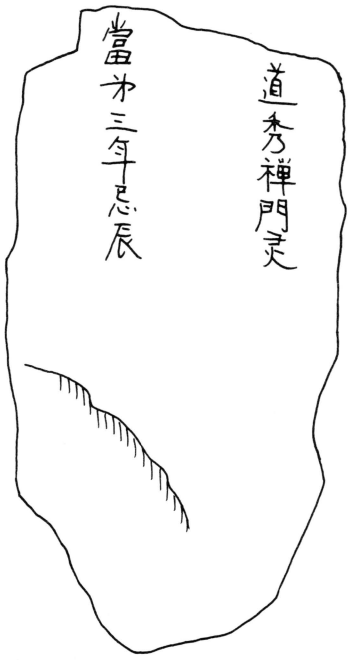
H：80cm　W：20cm
T：10cm　粘板岩

No.16



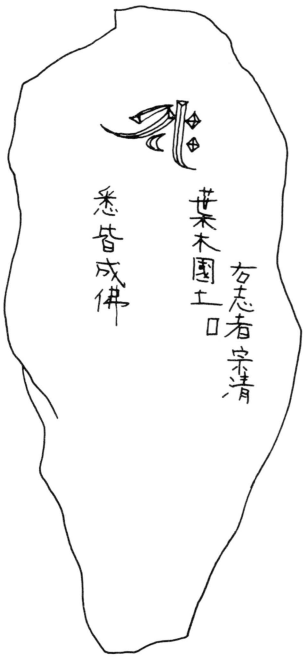
H：132cm　W：46cm
T：10cm　粘板岩

No.15



H：68cm　W：24cm
T：5cm　粘板岩

No.14



H：65cm　W：25cm
T：5cm　粘板岩

昭和五十五年度古文書分布調査報告

石巻市文化財保護委員　石垣　宏

一、江戸時代の小竹浜

小竹浜は、石巻市の東南部、牡鹿半島の西岸にある漁村である。渡波の佐須浜から南へ半島沿いにある天然の良港で、港の周辺に集落がある。また港の入口に前九年の役の時の安倍氏一族の伝説のある弁天島があり、さらに西に生草島がある。現在この小竹浜と折浜を結ぶ道路改良工事が進められておりまもなく開通する。

この小竹浜について、江戸時代の各書に記述されている内容を別記しておきたい。

小竹浜は、天喜四年（一〇五六）前九年の役の折、源義家に従ってきた士卒二、三人残って居住したという説（『牡鹿郡誌』）と安倍氏滅亡と同時にその一族がここに逃れて住みついたという説（『石巻市史』五）がある。さらに江戸時代は、「住民は明治維新まで江戸通ひの親船の船頭及び船乗りを専業となし、主として伊達家の米穀を積みたり。当時当地に御番所ありて夫等の監視をなせり」（『牡鹿郡誌』）とあって、江戸廻米の千石船（天当船）の船頭・水主の供給地であった。

小竹浜の地名が出てくる最初は、慶長十六年（一六一一）十一月、イスパニア特派大使セバスチャン・ビスカイノが、伊達政宗の許可を得て領内沿岸を探険しのちにまとめた『金銀島探険報告』である。同書に、「日曜日航海を続けて又河口水浅き一河の處に至れり、之より一レグワを距てて全く風を受けず水深き良港あり、千トン以上の船も碇泊することを得べし、此所に小竹といふ一村あり、此港をサンタ・マルガリタと命名せり、その緯度は三十八度強なり……」と記し、小竹浜は天然の良港と見ている。

江戸時代の小竹浜は、遠嶋（牡鹿半島）の内、狐崎組大肝入支配下の村であった。

元禄十一年（一六九八）の「牡鹿郡萬御改書上」には、

小竹濱　　東西　五丁四拾間
　　南北　壱丁五拾七間
一、畑代　壱貫六百五拾三文　御蔵入
　内　壱貫三百七拾九文　新田
　高　弐貫七百九拾三文　海上
　人頭　三拾七人
一、人数　三百弐拾九人
一、男　百九拾壱人
一、女　百三拾八人
一、小竹濱在家　東西　四拾七間
　　南北　五拾七間
　　肝入　庄三郎
渡海
一、田代濱へ　五里
一、網地濱へ　七里拾八町
一、大原濱へ　四里拾八町
一、諸廻船御札有
一、御穀改番所　三間五間
一、馬の瀬嶋　横弐拾間　長壱丁
一、生くさ嶋　横拾間　長三拾間
一、山王宮　弐尺七寸四方　板葺
　御神躰縁記無祭礼三月十五日別当
　無
一、明神宮　弐尺三寸四方　同
　右同断
一、弁才天宮　弐尺四方
　右同断
一、村寺真言宗江上山威光院
　仙台龍宝寺末寺

とあり、小竹浜は藩直轄地で、人口三二九人、交通の要地でもあり、脱石取締りの御穀改番所があったという。

さらに明和九年（一七七二）の『封内風土記』には、

小竹濱。戸口凡六十六。有号阿久濱地。神社凡三。神明宮。不詳何時勧請。山王社。同上。明神社。不詳何時祭何神。仏宇一。弁財天堂。在馬背島。不詳何時創建。寺一。江上山威光院。真言宗仙台府下。龍宝寺末寺。不詳何時何人開山。島凡二。馬背島。島上有池。傳云。弁財天御手濯池也。古昔季秋。邑民各放牝馬於此島。及春三月潮乾時。其馬帰邑。偶有産馬児者。生草島。巖一。在馬背島南磯。高四丈許。四方有縦横共一丈五尺許之穴。而洞達。其形如鞍。

とあり、六十六戸の家があり、神社・寺院・島について記している。

江戸時代小竹浜は交通の要地であり、船頭・水主の供給地であったが、江戸廻米の途中に漂流難破した記録もある。二つ紹介したい。一つは安永三年（一七七四）の六兵衛船・永福丸の中国福建省漂着の記録である。詳細は、石巻市史編纂資料集『伊寺水門』二集に佐藤雄一先生が解読紹介しているので参照されたい。

この六兵衛船は小竹浜の船であったが、石巻の船に乗り組んでいた小竹浜出身の水主の資料がもう一つである。それは寛政五年（一七九三）石巻港を出帆した若宮丸がロシアに漂着し、十六人のうち四人が帰国した記録であるが、その十六人の中に小竹浜出身の水主阿部屋吉郎次がおり、ロシアのイルクーツク滞留中病死したので、仲間が墓石を建立したとあり、これが明治三十三年に日本人によって確認されている事実である（『日本人漂流記』）。

十九世紀に入ると、領国体制にある日本に欧米列強が接近し開国を求めるようになり、沿岸に外国船が出没した。幕府はこれに対して文政八年（一八二五）に異国船打払令を出し、領国体制の維持をはかろうと、各藩に命じて沿岸の防備を厳重にするよう命じている。仙台藩でも沿岸の警備のため各家臣を割り当てたが、牡鹿半島の沿岸を担当したのが、登米伊達家と佐沼亘理家であった。（「海岸御備留」文政八年三月）。小竹浜にも鉄砲・弓・長柄などの武器が備えられている。

以上、紙数のこともあり管見できる史料でのみ、小竹浜の様子を記してみたわ

けである。

二、江戸時代の折浜の史料

折濱　東西　弐拾壱丁五拾間
　　南北　九丁三拾間

一、畑代　八百五拾文
　内　弐百七拾三文　新田
高菜畑代　拾七文
高　四百文　海上
人頭　百三拾壱人拾人
一、人数　百三拾壱人
一、男　七拾人
一、女　六拾壱人
一、折濱在家　東西　壱丁拾間
　　南北　壱丁
蛤濱拾軒之内　三軒折濱分
　七軒桃浦分
　肝入　清左衛門
折之濱之内田ノ濱
一、御城ゟ拾六里程
一、明野場
一、御林　壱ヶ所　御山守　平左衛門
　白石　細峯山
一、唐竹藪　壱ヶ所
一、伊豆権現宮　弐尺四方　板葺
　御神躰縁記別當無祭礼三月七日
一、村寺曹洞宗両沢山峰耕庵
　持高　三拾壱文
　湊村梅溪寺末寺
　（元禄十一・「牡鹿郡萬御改書上」）
折ノ濱。戸口凡十八。神社一。伊豆権現社。不詳何時勧請。寺一。西澤山峯耕庵。曹洞宗。本郡湊邑。梅溪寺末寺。傳云。傳室宗舒和尚開山。不詳其年月。
（「封内風土記」『仙台叢書』）

三、古文書分布調査報告

1　経過

本年度は、今まで調査していなかった小竹浜を中心に、さらに隣りの浜である折浜にも調査の手をのばしてみたわけである。小竹浜は、前述のように、江戸時代は水運の拠点として御穀改番所がおかれ、また海運の船の船頭・水主の供給地であった。さらにはその後の水運の発達と共に船主であった家も多く、漁業・海運の基地として繁栄を示している。

このような立地条件にある小竹浜に、水・海運・漁業関係文書が所蔵されていることを期待して調査に入ったわけである。まず事前に、小竹浜の旧家を中心に文書所蔵の有無を確認したわけであるが、昭和二十七年の大火のため所蔵しておられる家が少なく、あまり期待できそうになかったが、六月中に三軒ほどの家から情報を得、うち一軒については日程の都合上閲覧できなかったが、他の二軒については心よく見せていただいた。

㊀阿部隆治氏　㊁阿部重蔵氏　の二軒であった。両家とも旧家で、いずれももと船主である。特に阿部隆治氏には古い土蔵があり、大火の時にはこの土蔵で火が止まったとされ、この土蔵の中に入れてもらって閲覧させていただいた。土蔵の二階には和漢書類がぎっしり重ねられており、その一部を見せていただいた。寺子屋の教科書となった儒教関係の木版の書籍が多かったが、これを写真撮影して目録カードに貼付しておいた。

阿部重蔵氏宅には、天保から明治期の史料が多かったが、今回は表紙のみ写真にとらせていただいた。

次に折浜の調査に入り、平塚賢之助氏所蔵文書を見せていただいた。平塚氏は学区調整委員でもあり、文化財に対する認識も高く、好意をもって教示いただいた。東浜地区の旧家を回っても古文書を所蔵している家は少ないとのことであった。各浜とも津波や火災のためであるとのことであった。なお『石巻市史』五巻に記載のある折浜平塚家（大肝入）の古文書の所在を伺った。賢之助氏の助力で折浜大肝入平塚家の屋敷の襖の下張りから出た古文書が、現在市図書館に所蔵されていることが判明した。量は千数百枚になるものと思われるが、大きな袋で四袋にぎっしりと入っておった。現在一袋整理中であるが、大肝入（狐崎組）文書であるので、行政上の問題が解明されることが期待できよう。

2　内容

調査によって確認できた文書は、後述の目録の通りである。

(ア)阿部家文書（小竹浜阿部隆治氏蔵）九点
(イ)阿部家文書（小竹浜阿部重蔵氏蔵）卅点
(ウ)平塚家文書（折浜平塚賢之助氏蔵）三点

3　調査物件に対する所見

(ア)　阿部（隆）家文書

前述の如く、和漢書類が多く貴重な書籍である。その外に貴重な文書としては「衣服之制」（年代不明）、「御用傳留」（慶応四年正月）、「文政武鑑」、「天保八年の暦」がある。この内、「衣服之制」については、一部解読したのを後述したい。

(イ)　阿部（重）家文書

所蔵文書には、天保十二年の山王大権現の鳥居の寄進と、明治十四～十五年の日枝神社の屋根替えの会計報告が多かった。中でも貴重なものは、天保十年に三十一両二歩の献金をしたのに対して、仙台藩より「永代麻上下着用」の許可を受けた書状、石巻前金船（南部藩江戸廻米の船）の沖船頭重蔵が二人扶持を与えられた書状、天保十二年の海運に関しての条文の書状（目録10）などである。

(ウ)　平塚文書

平塚家の先祖は白川氏を名乗ったというが記録はなかった。文化三年七月二日付の高野山五大院より先祖供養の掛軸が所蔵されおり、宛名は白川庄三郎となっている。その五大院に往復した旅日記が残されているが、一部破損しており全文解読は困難かと思われる。その外金子借用証文等が多く所蔵されている。

四、保護に関する所見

本年度は小竹浜を中心に、さらに折浜からも情報をいただいたので調査したわけであるが、いずれも古文書や書籍を大切に保管、所蔵しておられ、ただ一部虫害のため破損しているのも見られたが、その他は家宝として大切に保存されておられるので安心したわけである。今後貴重な史料は、マイクロフィルム化、また

はコピーを二部ずつ取って、一部は市の施設に、一部と原本は所蔵者にという方策をとるべきと思われる。市の施設に関しては、古文書の保管・展示・研究・記録保存備品の備えつけ、古文書担当学芸員の配置のできる博物館を切に望むものである。

五、今後の調査予定

本年度の調査にひきつづき、次年度は、①寺社関係　②地区設定として稲井真野日向・日影地区　③市民よりの情報提供による調査を進めたいと思っている。市内で一点でも古文書をお持ちの方、ぜひお知らせいただきたい。

〈阿部(隆)文書〉

衣服之制

※一御一門衆ハ三千石以上制外たりといへ共、御國元ニおゐてハ多具ハ軽品を被相用、常ニハ羽二重以下木綿を茂可被相用い

一羅紗羅脊板者火事装束合羽之外、江戸御國共御一門衆ハ三千石以上たりとも着用難成い事

一三千石以下者家柄役之高下ニよらず、巻物以上着用難成い事

但御家老御着用不苦い且江戸他國不及申発足着い節共大番組以上も巻物以上着不苦い事

※一番頭以上之輩指立い節巻物以上着用不苦、常々者羽二重以下木綿をも可相用

一組侍者羽二重以上着用難成い事

但江戸他國ニおゐても巻物以上着用難成い事

一家業人芸道相勤い節巻物以上相用不苦い　繻子緞子紬等者難成い事

但廉服相用い儀者勝手次第之事、常式御覧ハ勿論御見分等ニ者羽二重以下斗堅相用、巻物之類着立候節斗ニ可相用、常々ハ身分ニ応い品可相用由、文化拾一年七月ニ相觸

※一婦女之衣服者父夫之身分准可申い縫縮ハ金糸入者着用難成い事

但浩所以下者縫ちらし一切着用難成

一幼少之子供男女共六ニ可准事

一縫紋金糸紅糸紫糸難成い事

但婦女幼少之男子金糸外不苦い事

一紅裏ハ紅襟紬ハ御免之者之外着用難成い事

但拝領物ニい共、右同断、且拾六歳迄着用不苦い、尤頭中之よら品ハ不差支い事

附紅裏御免之者肌身襟袖ハ□□□□之襟共不苦い事

一白無垢者法服法□之外着用難成い事

但諸侍之外何無垢ニ而茂着用難成い事

一襟端袖頭中袖口裂等□紬之物者類用い而茂不苦い事

但純子繻子紬以上者難成い、且合羽之襟ニ者毛織兼天鵞色共不苦い

婦人相用い坊主合羽之半襟ニも天鵞色相用不苦い事

一御旗元足軽ハ諸組之者凡下御扶持人等法躰之者共絹紬之類可為無用い事

但、惟子半　等者不苦い、且凡下御乱舞之者芸道所佐相勤い節ハ御掃除坊主外人會交之節ニ限り絹紬着用不苦い事

法躰御免之諸職人江戸表外人會交之節絹類着用不苦い事

一百姓者大肝入始男女共布木綿之外着用難成い、帯襟袖口等惣而絹紬之類可為無用い木綿合羽一切着用難成い事

但百姓者医師ニ而茂難成い事

※一御城下町人御門前町之者迄男女共木綿可相用い、襟袖口帯等ニ絹つむき之類相用い儀難成、且晒惟子半晒者相用不苦い事

但御町医師者其身ハ妻子共絹紬着用不苦い、帯等ニ者巻物ハ難成い事

※一倍臣之衣服

一御一門衆家来一家ハ小性迄御一家御一族御家老ハ三千石以上之家来一家ハ留主居迄代々着座ハ大番頭格以上之家来一家より家老指次迄衣服之代々着座之家来ハ此格ニ無之い

右之分指立い節絹紬着用不苦い

※一五百石以上之者番頭格以上之家来ハ千石以上平士之家来、右ハ家老指次迄之者ニいハ、外人ハ之使者其外着立い節斗絹紬着用不苦常々ハ木綿可相用い事。

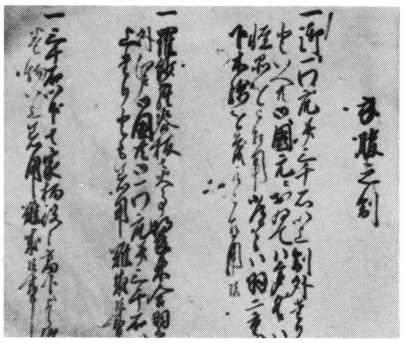
右之外何茂木綿着用可仕い

※一妾者侍之娘ニ而茂子供有之い共衣服家来之格ニ可准い

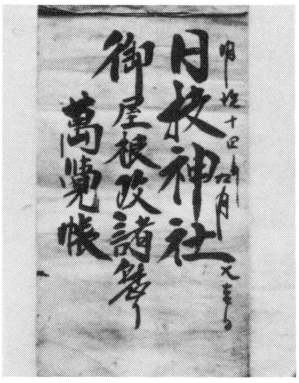
一宿守屋敷主内之者可准い

一社家之類山伏ハ坐頭者□□有之いとも俗衣之節者御取扱之身分次第俗迄同格ニ御心得い事

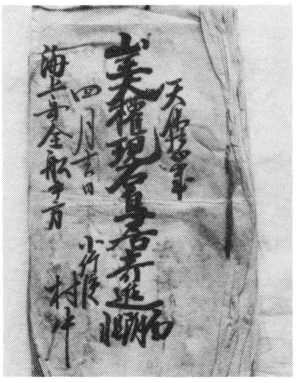
一野袴者番頭格以上之外ハ着用難成い事



◀阿部隆治氏所蔵文書　衣服之制



◀阿部重蔵氏所蔵文書　萬覚帳



◀同右　寄進面附帳

但御番医師御近習之者或者小性頭仮役ニ見習之者共御城下外ニ供等之節着用不苦い事
一踏込者諸士ニ限り着用不苦い、雖然御騎馬ニ御供立且火事場江者兼而御免之輩之外着用難成い事
（略）
一野袴踏込立い時張子繻子絖之外巻物以上着用不苦い事
（略）
一東照宮御参禮之節廻□之御目踏込着用不苦い事
一無地羅毛羽織ニ相用不苦い事
一羽織袴等裏ニ巻物以上相用い儀組士以下者難成い事
（略）
一脊割羽織　御参勤御下向ニ在々御出馬御行列立を始、都而旅装束之節限り勝手次第着用不苦い事
（略）
一脊割羽織着用御家中一統ニ陪臣御帯刀之者迚被相免い事
一諸士帯縊ハ巻物以上不苦い、絖繻子縫箔金入之類ハ難成い、天鵞毛ハ御一門衆三千石以上たり共相用い義ハ難成い尤拝領物二而も同様之事

「衣服之制」の文書の一部解読文を載せたわけであるが、条文の※の印は、『仙台叢書』二巻の「法禁」の中の「五十七、御一門衆等衣服之制之事」と同一の内容の条文である。「法禁」の条文は明和七年十月であるが、阿部家文書の「衣服之制」の年代は不明である。

目録

阿部（隆）家文書（小竹浜　阿部隆治氏所蔵）

1、衣服之制
2、御用傳留　慶応四年
3、囲碁書　文政二年
4、竹敲聞寄
5、宮城県地誌
6、文政武鑑
7、明君家訓
8、天保八酉暦　天保八年
9、掛図（藤原寿信筆）
その他　和漢書類　多数

阿部（重）家文書（小竹浜　阿部重蔵氏所蔵）

1、船魂神額
2、法名控
3、山王大権現石鳥居寄進面附帳　天保十二
4、山王様石鳥居ニ行屋勘定目録　天保十二
5、山王大権現石鳥居寄進面附帳　天保十二
6、日枝神社御屋根改諸懸り萬覚帳　明治十四
7、三王大権現石鳥居寄進　天保十二
8、日枝神社御屋根替ニ付金子請取帳　明治十五
9、日枝神社金子請取帳　明治十五
10、書状　天保十二
11、書状（麻上下着用許可）　天保十
12、書状（二人扶持）
13、書状　天保十二
14、由緒書　昭和二十八

平塚家文書（折浜　平塚賢之助氏所蔵）

1、掛図
2、掛図　文化三
3、書状（遜り証文）　安永八
4、覚（受領証）　文化八
5、書状
6、書状
7、日記覚帳
8、書状
9、書状　天明元
10、覚　明和七
11、書状
12、書状

小竹浜地区民俗資料・民具収集調査報告

石巻市文化財保護委員　鈴木東行

一、はじめに

現今、急速な技術文明の進歩によって社会は激しく変動している。それにつれて過去の慣行・習俗もだんだん実施されなくなってきている。

特に常民の生活を支えてきた民具は、その機能が失われると紙屑のように捨てさられる運命にある。

ここに小竹浜の調査収集を行い、石巻地方の基層文化を知る資料を得、合せてその保護につとめたい。

注……　調査は古老からの聞き取りを主とし、調査の時点を明治末～昭和初頭とした。調査補助員として石巻工業高校人文科学部員（阿部訓彦・渡辺茂・宮川純・山田茂樹）の応援を得た。調査項目は総観・生産暦・衣・食・住・運輸交易・一生の儀礼・社会生活・年中行事・民具とし、昭和五五年七月二二日～二五日に実施した。

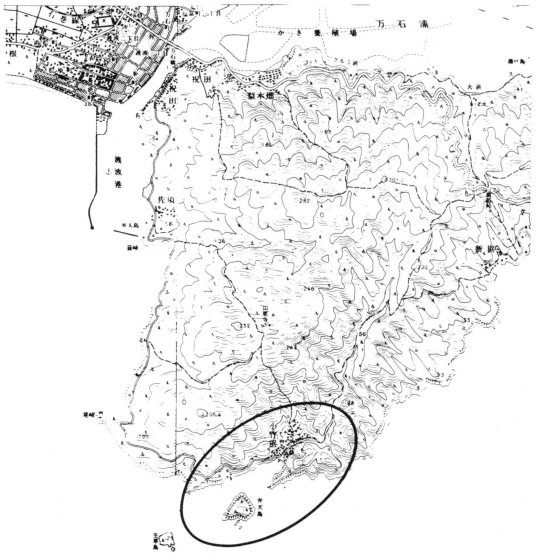
二、総観

明治末の小竹浜は五二戸で昭和五一年は世帯主一〇二人である。明治期は沿岸大謀網漁が主体であった（表1・生産暦の注参照）。しかし、今（五一年）は船員が多く、地先定置網を経営している世帯は僅かに二で水産養殖が一四世帯である。

漁業協同組合の正式結成は昭和一一年である。申し合せ組合が形成されたのは明治末に村有林二〇〇町歩を売って甲の組合五二人を作った時に始まる。その後二〇人が加入したが、それを乙の組合と言った。

明治末以前の契約は下・中・上区から役員として当頭が選出され、一年の行事を決定し、総会は年一回あった。互助慣行は道路普請・水取沢の清掃・堀の掃除である。

▼（図1）小竹浜位置図



◯ 調査地区

◀（写真1）弁天島

▶（写真2）小竹浜漁港前

◀（写真3）昔は沢が流れていた道路

◀(写真4) 日枝神社(もとは山王大権現)

女の年令集団として嫁講の地蔵講・婆講の念仏講があった。お盆の一六日の盆船送りは上・中・下区の子供たちがそれぞれ大きな盆船を作り海に流した。昔は子供組があったと思われる(写真18参照)

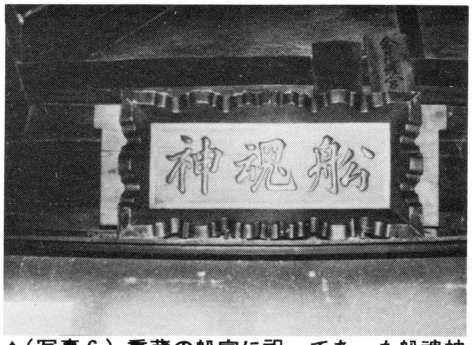
氏神(山王大権現→日枝神社)の祭日は旧暦三月一五日、弁天島の厳島神社(弁天さん)の祭礼は旧五月一三日(戦前は旧四月一三日でこの日に日枝神社の祭りもやっていた)。(写真1・4参照)

出船―弁天さまのそばを通過する時、海水をツルベで汲み上げ口をすすぎ、手を洗い、次に汲んだ水を船のお船霊さまにさっとかけ、お潮上げをして大漁を祈願した。また大きな魚をとった時はホシ(心臓)をお船霊さまに「トウヤ!!また大漁」と言ってあげ拝む。

小竹は陸路で佐須―渡波方面に出るには「山居峯」を歩いて越えて行かねばならないので、まさしく陸の離島で、魚や日用品の運搬は和船に頼った。動力船が運航する前、帆と二挺櫓で走る和船で魚や日用品・人員を運送する専門業者がいた。

生活が海と結びついている小竹浜の人人は江戸時代、江戸廻米船(千石船)の水夫としても活躍した。特に三代小竹重蔵は親船明謙丸の船頭(船主か?)として功があった。文政年間、仙台藩より裃を賜った。(写写真5・6・7参照)

(話者　阿部金三郎氏による)



▲(写真6) 重蔵の船室に祀ってあった船魂神(阿部金三郎氏宅)

▲(写真5) 小竹重蔵

▲(写真7) かみしも

三、生産暦
(次ページ表1参照)

四、仕事衣
(表2参照)

五、住　居
(写真8～14及び表3参照)

六、食　物
(写真15・16及び表4参照)

七、運輸・交易
(表5参照)

八、年中行事　(旧暦)

(一) 正月の準備

お札迎え……一二月一三日。渡波大宮町の浜大明神(大国さん)に行ってお札をもらいに行く。

媒払い……一二月一三日。

マチタシ・松迎え……一二月二三日。

餅つき……一二月二六日か二七日。

しめ縄つくり……一二月二八日。マチタシで買ってきたワラを臼の上でたたき、八畳間に張るだけの「しめ縄」をつくる。

(二) 大晦日

庭のすみに「カサカゲ」(スビや鰹・スイをお正月に食べる分だけ腹と腹と合せてかけさげる)。

お正月さまを飾り、「ワドシ縄」を納屋・風呂場・井戸・便所にかざる。

しめ縄にさんがいの松とヤヘ紙・こん

生産暦

（表1）

話者　阿部金三郎（明29．6．22生）

旧暦

月＼種類	カツオ（一本釣）	メノケ延縄	ナヨ延縄	サメ刺網	マグロ大網	イナダ	ハモド	タコ（イシヤリ／カメ）	アワビ	シウリ貝	ワカメ／ヒジキ
1月		↓	↓	↓	↓ たてこみ				↓		
2月		↓	↓	↓	↓				↓		
3月		↓	↓	↓	↓				↓		↓ ↓
4月	↓				↓ 漁				↓		↓ ↓
5月	↓				↓					↓	
6月	↓				↓						
7月	↓				↓						
8月	↓				↓ 期	↓ 大謀網	↓	↓			
9月	↓				↓	↓	↓	↓			
10月							↓				
11月											
12月		↑	↑	↑							

注……

- 地形的、海流関係から、また冬期の「ナレ風」（北西風）によって海は荒れるので、昔から養殖に不向である。
- アワビの採取は、干潮時カッコー（小舟）で1人で長さ15尺内の「アワビカギ」で「ガラス」を使用しとる。小竹のアワビは北上川の水の関係か塩分が少なく美味である。土用すぎるとだめ。
- シウリ貝はトングワを用いてとる。乾燥してケブをとってかりかりと乾燥しビール箱につめて買いあつめ、横浜に大正初め出荷した（中国へ輸出のため）
- 明治末、大網（大謀網）の株主は旧家52人で現在は38人。漁場は2つ。一年交代（26人・26人）で多くとった。瀬主は渡波の人にたのむ。納屋で塩ぞうし、旧正月かけてうる。
- イナダとはブリの小さい魚の呼名。一本釣りもやる。
- タコ漁はイシヤリを多く用いカメを使用したのは西野家のみ。
- サメ（アブラザメ）とナヨ（オウガイ……美味）は、ツクワの材料となる。

（表　2）

衣	話者	金　星　さとし　男(女)（明治43年12月15日生）

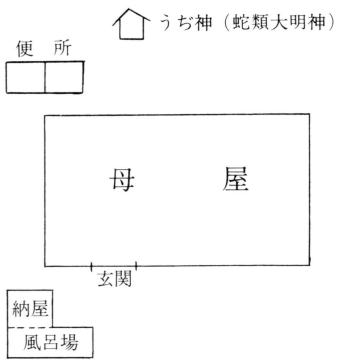
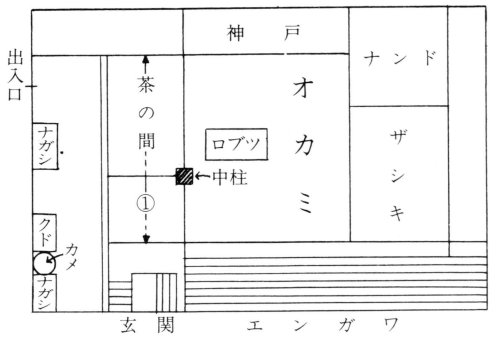
仕事着									
肌着(下着)	男		シャツ（前ボタン）	モモヒキ（コン）		女	サラシ　コシマキ		
	仕事別（季節別）		☆上　体	☆下　体	手	す　ね	☆はきもの	かぶりもの
☆男	漁	夏	ドダ着（着物）	コンのモモヒキ（シマ）				
		冬						
	山	夏	地織りのシマのシャツ	コンのモモヒキ	テッコ	キャハン（コン）	ワラジ	手ぬぐい
		冬	下にメリヤスのシャツ	上にズボン（コールテン）	軍　手	〃	カンジキ	メダシ（毛糸）
	畑	夏						
		冬						
☆女	いそ浜	夏					ワラジ	手ぬぐい、カサ(マンジュウ)
		冬						
	畑	夏	地織のさしたもの(ドザッコ)	コンのモモヒキ	テッコ		ワラジ	ふろしき
		冬			コッパゴテ			
雨　具								
防　寒　具			ドブグハンテン（わたの入ったもの）		テブクロ（わたを入れた）		ジンベエ（長くつのようなもの）	

染・織				
☆麻・藤・楮など絹・木綿以外の繊維で布を織ったか			草木、その他を染料に使ったか	
材　料			色	緑
名　称			材　料	くるみの皮
方　法			方　法	皮をせんじて、煮出して染める
用　途				

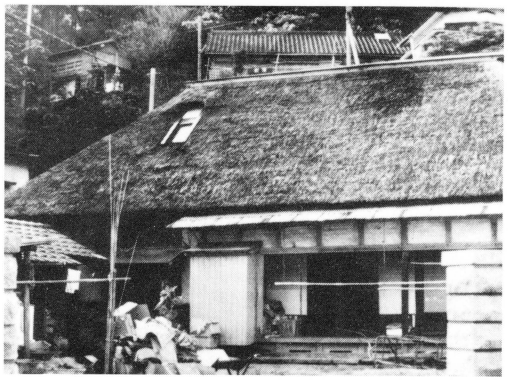
（表３）

住

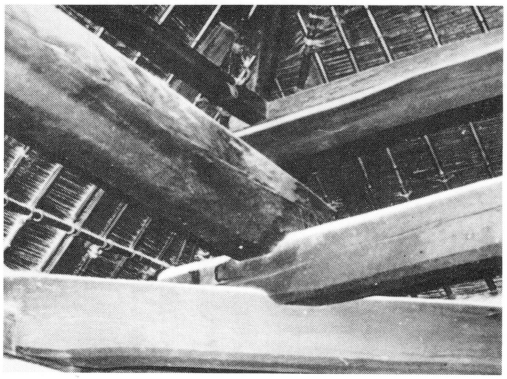
話者　西野真津江（昭和５年12月24日生）

屋敷内置置図	母屋間取図
	

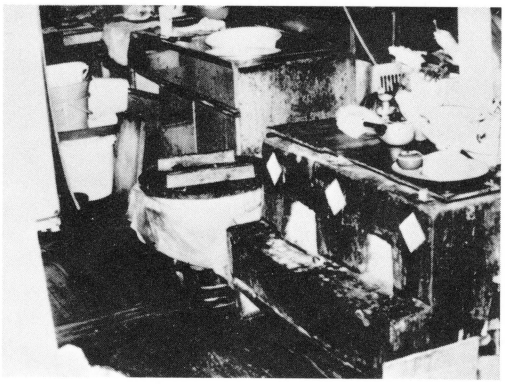
概要変遷その他	西野家は小竹の草分けの家だと部落の人々は言っている。屋根型は寄棟で屋根材はカヤのくず屋である。昭和32年に「サゲブキ」(悪いカヤをぬきながら新しいカヤをさす）をやった。 飲料水は「北の沢」(通称、水取沢）の岩にたまった水を利用した。戦後はタンクを用いた。隣家のカドにある井戸は主として洗濯用である。	①で「ワラジ」や網をつくろう部屋 オナゴザシキ ロブツ　ヨコザ ●出産の時は渡波の産婆に行く、台所で出産したこともある。 ●釜の神はない（西野家では）。



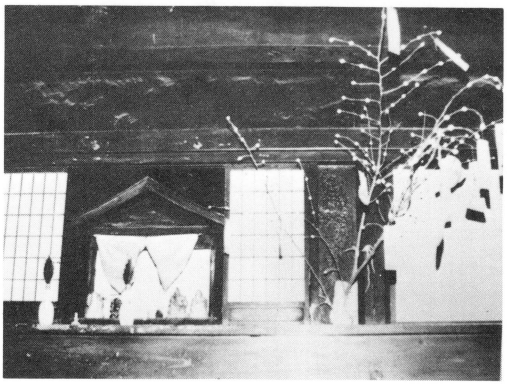
▶(写真8)母屋(西野家)



◀(写真9)天井(西野家)



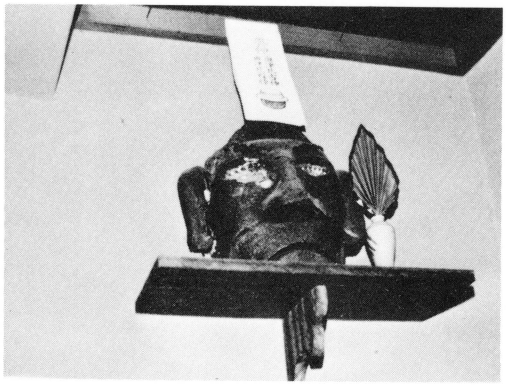
▶(写真10)かまど(ヘッツイ)—(西野家)



◀(写真11)神棚(西野家)

▶(写真12)仏壇(西野家)

◀(写真14)うず神(屋敷神)—(西野家ではない)



▶(写真13)釜の神(岩崎あやめ宅)

（表４）

食	話者	阿部　あさの	男 女（明治26年8月5日生）

平常の主食	早朝	朝	朝～昼	昼	昼～夕	夕	夜	時季による違い
時刻	漁によって3時	6時	10時ごろ		15時		冬期	
名称		朝ごはん	たばこ	お昼ごはん	たばこ	夕ごはん	夜なべ	
内容 配合率		米と麦を半々	お茶 おかし あんもち まんじゅう		午前と同じで仕事によってちがう		お茶など	☆あくぬきする主食物（種類・方法） ●コガなどにわらびをたばね、ならべ灰をかけて熱湯をかける（わらびのホダをとる） ●かやの実もコガに入れてあくぬきをする。いってたべる（お茶菓子用）

保存食	塩漬け	みそ漬け	乾燥	その他
	さんま、かつお（きりみ） きうり 大根	大根、みようが、きうり、しその実 ●塩で漬け水で洗って塩をきってから桶に入れ味噌をのせる。	わかめ、のり、ふのり、まつも 天草 ●ひじき（がすがこい用として）	山ゆりを食べた。

餅・だんご等	餅をつく日（特別の餅は種類・名称も）	赤飯をつくる日	☆だんご・しとぎ・おはぎを作る日（種類・名称も）		
			だんご	しとぎ	おはぎ
	月の１日・15日・28日	●日枝神社のお祭り（旧３月15日） ●弁天島の厳島神社のお祭り（旧５月13日） ●龍神さまのお祭り（旧8月）	●お盆 ●うず神のお祭り（屋敷神）	あげたことがない	●彼岸の中日 ●お盆の15日 ●種痘ができた時砂糖を入れないおはぎをつくる

飲食用具	鍋・釜	飯わん	汁わん	膳 ☆平常	膳 晴（ハレ）のとき	弁当入れ（漁に行った時）
名称	ナベ・カマ	ちゃわん	おわん	飯台（ばん）	足高膳 会席膳	沖箱 メッパ
材質	鉄　鉄	陶器	木製	クルミの木		杉 さくら
入手法（製作地）	石巻・渡波	左に同じ	左に同じ			船大工

臼	杵		
ウス　ヒキウス	てっきね	千本きね	もちつききね
けや木　みかげ石	さくら	さくら	さくら
自分でつくる			

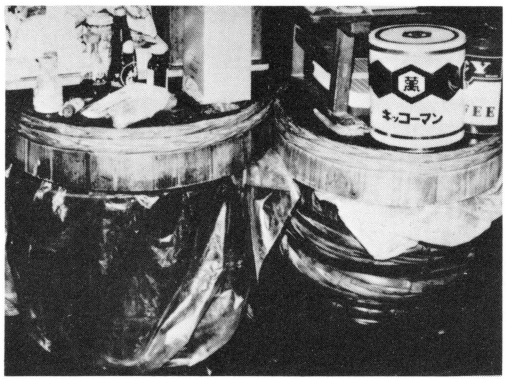
（表５）

運輸・交易	話者	阿部　金三郎	男 女（明治29年6月22日生）

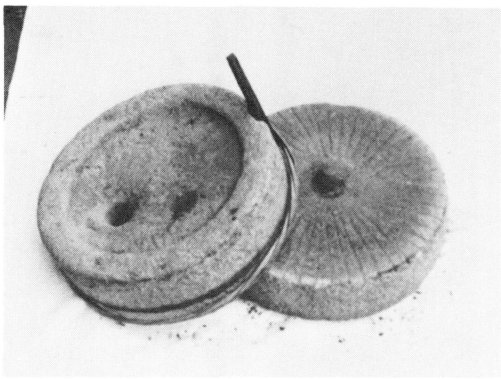
運搬具	頭上	肩負い		背負い		畜力	舟	車	そり（木馬）
☆名称		手おけ	テンビン	バンドウ	ヤセウマ		和船		そり
形状・材質		杉	杉	わら	杉縄				杉
用法		水くみ 肥料運般		薪を背負う			２人で櫓をこぐ風向きによって帆で走る。		

運輸業者	名称		時期		用具	

交易 ☆市		行商			物々交換	道具・牛馬の貸借
名称	マチタシ	他地域へ出る者（商品別・地名も）	石巻・山形方面（魚貝類）			
時期	12月23日（正月）　7月13日（盆）	行く時期	冬期			
所在地	渡波	他地区から来る者（どこから来るかも）	大正年間に盛んに来た。 主に石巻、渡波方面から （瀬戸物・菓子・茶・衣類）			
商品名	盆、正月用の品	来る時期	大漁の時、聞いてくる。			
商人の来る範囲		運搬具				
買手の集まる範囲						



▶(写真15)みそ樽



◀(写真16)ヒキウス

ぶをはさんで玄関をかざる。

神棚にお膳（オミキと魚をのせた）をあげ拝み、さげ食べ、それから風呂に入る。

(三) 正　月

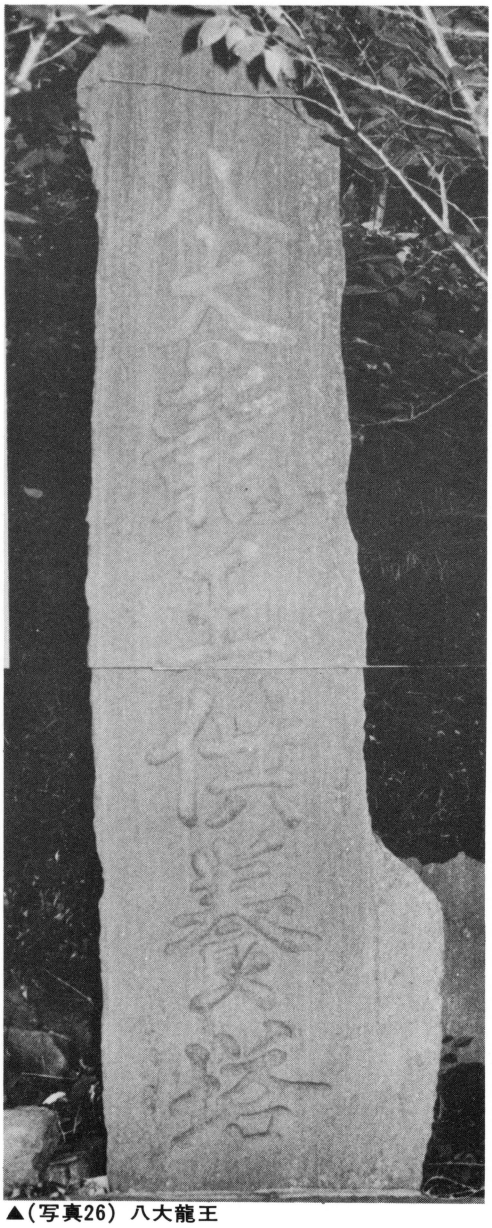
元旦……朝早く山王権現（氏神…日枝神社）の左脇にある八大龍神・金比羅大権現・山の神に参拝し、それが終って船で弁天島に行って厳島神社にオミキとオハネをあげたり、お供え・切り餅などをあげて参詣する。

注……正月中でも昼間はサメ網をハセ（前の沢）にかけ修理する。

獅子振り……一月二日。夜六時頃からする。三日から四日かかる。

臼起こし……一月四日。臼を起こし若水でふせていた臼の中の米（一升ますに入れてある）を炊いて神棚にあげ拝む。

注……臼の年とりと称して大晦日の日に臼をふせ、ふせた臼の上に若水桶をのせる。

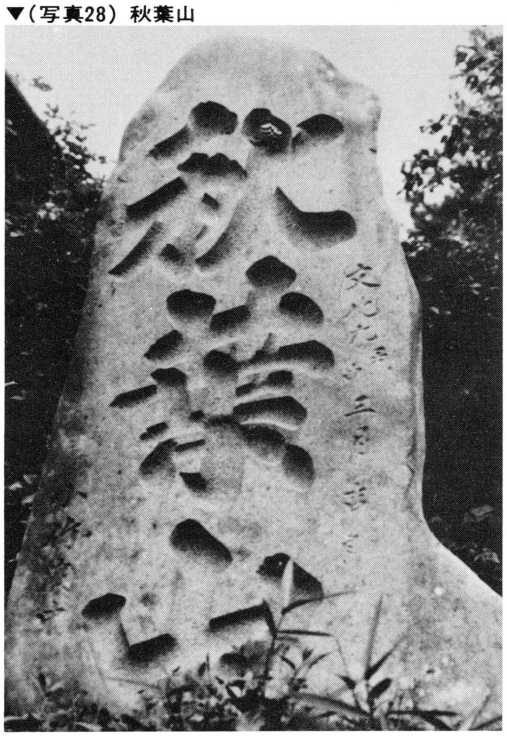


▲(写真26) 八大龍王

▼(写真27) 山の神

またこの日の朝、お粥を炊いて神棚にあげ、拝み、さげて食べ、その食べた茶椀を洗うのに使った水を厄除けのためだと称して屋敷の周囲にまく。

▼(写真28) 秋葉山



ハラミ木……一月七日。山からカツノ木を伐って来て、先を四つにさき、ヤヘイ紙をはさみつける。ハラミ木を神社にもって行き、「今年も、なんにも悪いことないように」と唱えながら、神社を叩き境内を一廻りする。

カラスボイ……一月一四日。神棚にあげていたハラミ木を竹の先につけて、朝、カラスボイをする。

夜おそく年寄りたちが家々を廻り、「丈夫な男の子、生むように」とハラミ木で嫁の尻を叩いて歩く。

寺参り……一月一六日・一七日。

小正月……二月一日。神棚にお供え物をあげる。

(四) 三・四月

氏神（山王大権現…日枝神社）の祭…三月一四日。夜ごもり、人形芝居、タナ（雑菓屋）がでた。三月一五日・お祭り、家で赤飯を炊き、皆で参詣する。

彼岸……三月二一日。

弁天島（厳島神社）の祭……四月一三日。参拝する。

(五) 七月

マチタシ……七月一三日。

盆棚かざり…七月一三日。七月一四日は盆棚にダンゴやうどんをあげ拝む。

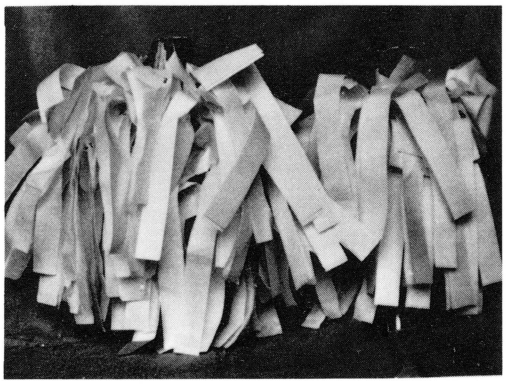
盆船流し……七月一六日（写真18参照）

二〇日盆

送り盆……七月三〇日

注……時間の関係で年中行事は正月に集中した

話者　阿部力蔵　明34年1月10日生



◀(写真17) ハラミギ

▲(写真18) 精霊送りの盆船（昭和30年撮影。今はこのようなものはない）

九、民具調査から

調査した民具から主なものをあげるとツノ(鰹の擬餌釣具)…(写真19参照)延縄かご・たこかぎ・あわびかぎ・ほやかぎ・かにかご・はもど・カタギ・ヒキウス(写真20・21・22・23・24・25参照)と少なかったが**「ほやかぎ」・「たこかぎ」・「カタギ」**など他地区に見られない貴重な民具があった。「ほやかぎ」は阿部力蔵さんが現在でも生草島で使用している数少ないものである。

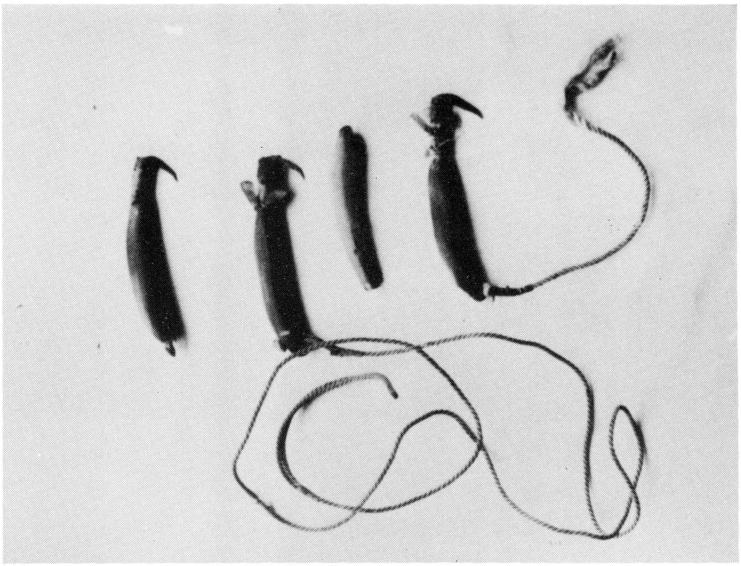
たこかぎは祝田の杉浦さんが使用していた「たことりかぎ」(餌をまきつけない)と牧浜の阿部さんのかぎをつけなく、ただ餌だけつけてとるものと二者を合せた漁具である(いしのまき市報―昭和五四年一一月号―文化財たんぼう参照)

また竹で「はもど」を作る時、用いるカタギなど珍しいものである。

小竹では現在(昭五五年)でも浜に木製の和船が多くあったのはなぜだろう……他の浜で殆んどプラスチック製になったのに……再調査の必要があることを感じた。

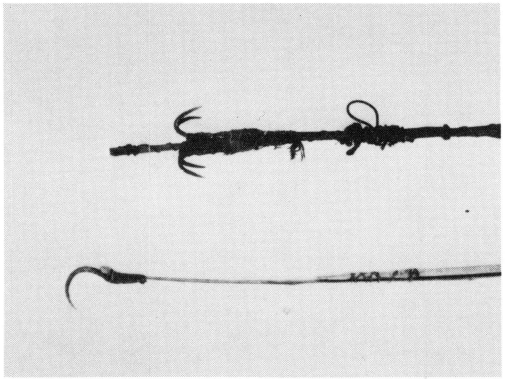
一〇、むすび

区長さんの阿部勁二氏・宿泊所の阿部力雄さん・阿部金三郎さんなど多忙な時をさいて話し世話してくれたことに感謝します。また、近代文明に毒されず自分の手と頭で素材(自然)を活かし漁具を製作し、漁に従事している力蔵さんに接し、自然と共にあった人達のたくましさ……ここにこそ地域文化の根があることを思い、むすびとします。

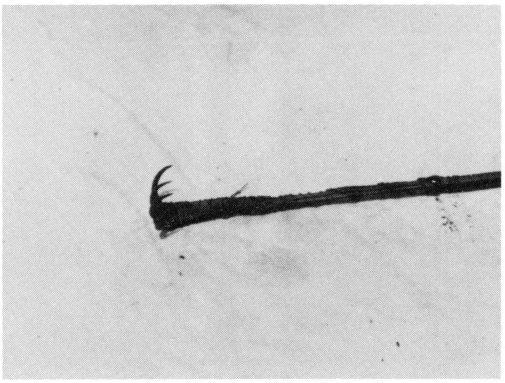


▲(写真19)ツノ(鰹釣の擬餌釣具―和船時代のもの)

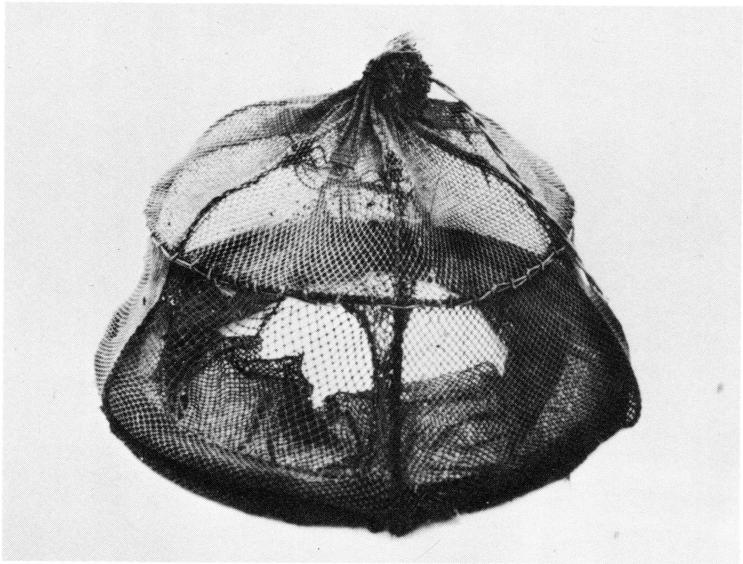
▼(写真20)延縄かご



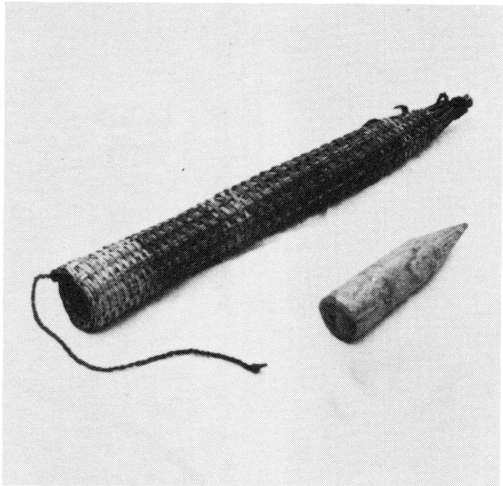
▶(写真21)上　たことりかぎ
下　あわびかぎ



◀(写真22)ホヤカギ
(長さ約10㎝、二つつなぎ)

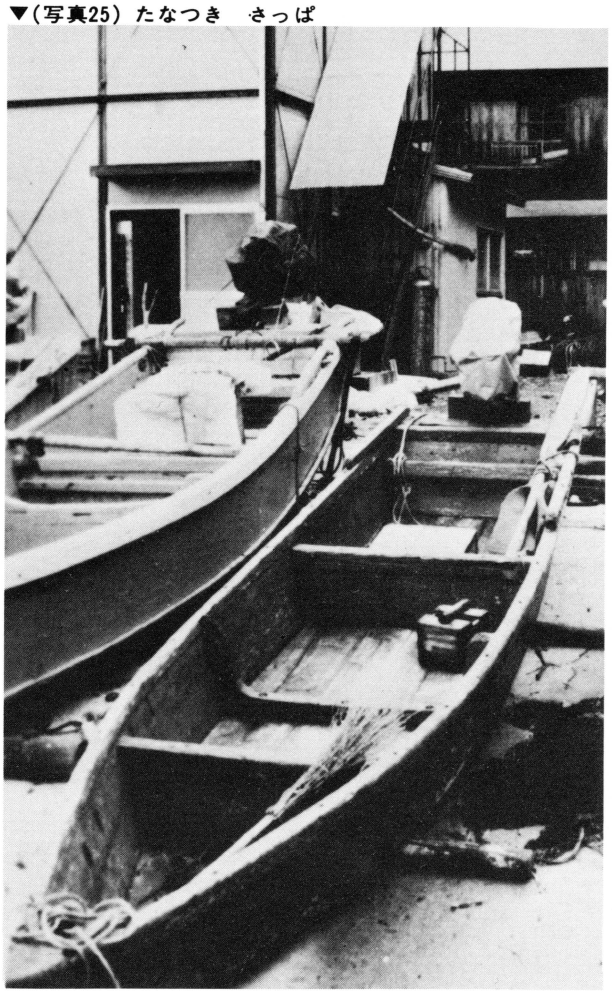


▶(写真23)カニカゴ



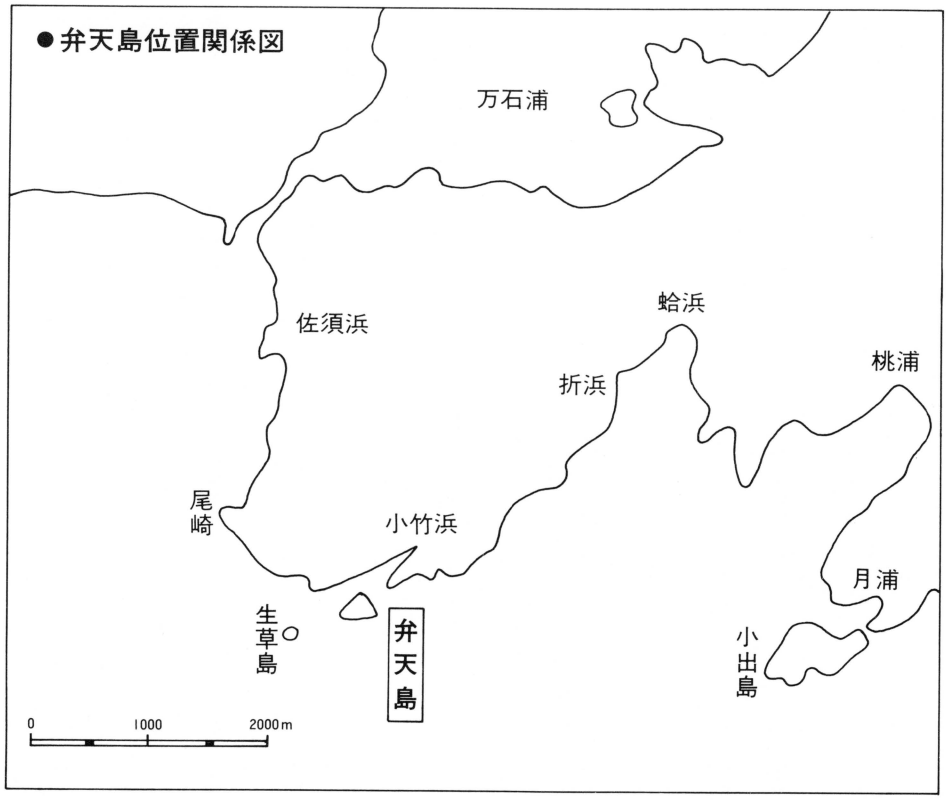
▲(写真24) 左　はもど
右　カタ木

▼(写真25) たなつき　さっぱ

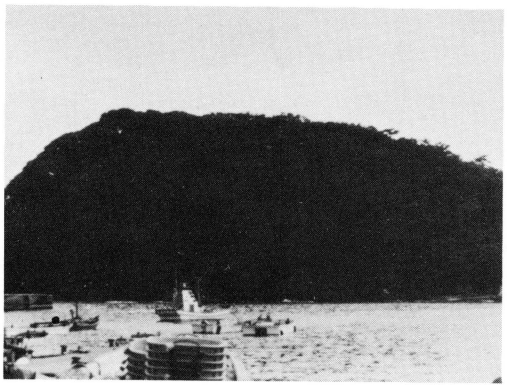


弁天島植生調査報告

石巻市文化財保護委員　佐々木　豊



◀タブノキ林



▶弁天島全景

一、はじめに

弁天島は、牡鹿半島の西部小竹浜のすぐ沖にある、面積約三・五haの無人島である。中生代の稲井層と呼ばれる粘板岩からできている島で、最も高い所で海抜四七mの標高である。

島の周囲はおよそ八〇〇m、波に洗われる岩石の見られる崖状地になっている。島の中央部は平坦で、全体として、南東から北西に向ってなだらかに傾斜している。

島全体がタブノキ、クロマツなどを主にした暖帯林で被われていて、タブノキ林としては、ここの林が、現在仙台湾内で見られる最も大きな規模の林である。

弁天島のタブノキ林が自然をよく保存しながら残っているのは、この島が小竹浜の人達によって信仰の場とされてきたからである。島には嚴島神社（弁財天）が祀られている。

弁天島のタブノキ林については、『文化財だより』（2号・昭四九・三）や市報の「文化財たんぽう」などで、かんたんに紹介されているが、環境庁や県の調査の際には、特色ある自然地域として特に調査の対象とされている。

石巻市文化財保護委員会は、昭和五五年度に、弁天島の自然を保護する目的でその資料を得るために、植物の分布調査を実施した。調査には筆者が当り、昭和五五年七月に植生調査を実施し、一部補充調査を五六年八月に実施した。

この報告はその結果の概略である。

二、調査の方法

1、植生調査

調査場所に方形区を設け、各階層毎に出現する植物のリストを作り、全部の種類について、総合判定法による優占度によって評価した。

方形区の大きさは、高木層をもつ林分では一辺10m～20mとし、低木林では5m～3m、草本群落では2m～1mとした。

優占度は次の方法によった。

5＝調査面積の75％以上を被う
4＝調査面積の50％～75％
3＝調査面積の25％～50％
2＝調査面積の10％～25％または個体数が極めて多い。
1＝個体数は多いが被度5％以下
＋＝個体数はわずかで被度も極めて低い。

階層は一般に高木層（T_1）、亜高木層（T_2）、低木層（S）、草本層（H）とした。

2、群落の区分

植生調査をもとに組成表を作り、相観を考慮して、群落の区分を行なった。

三、植生

弁天島では、中央の部分がタブノキを中心にした林、周辺部がクロマツ林になっている。

タブノキ林は、南・東側が純林状で、北・西側はカシワ・イヌシデ・イタヤカエデなどの落葉広葉樹が多く混交する林となっている。一部に高木層を欠く丈の低いタブノキ林も見られる。

クロマツ林は、周辺部でも西・北側に発達している。一部かなり中央部に入りこんでいるところもある。南・西側の崖状地には、わずかではあるが低木林が見られる。弁天島では島が岩でできている上に、周辺部の崖地が強い波に洗われるせいか、イブキなどの低木林の発達はあまり見られない。

◀崖地の植生

1、タブノキ林

植物の生育環境として最も恵まれている中央部の平坦地と日当りのよい南・東側の斜面に見られ、胸高直径35cm、高さ20m前後のタブノキを優占種とする林である。

高木層には、キズタ、フジなどのつる植物が目立ち、たまにケヤキが混じる。亜高木層ではトベラ・ヒサカキが多いが、ユズリハ・シロダモ・ヤブツバキ・カヤが現れるのが特徴である。

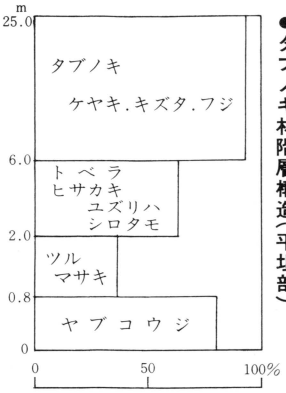
低木層ではツルマサキが多い。

草本層では、ヤブコウジが優占し、コウライテンナンショウ・リュウノヒゲが見られる。

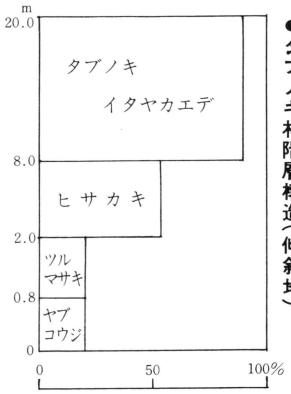
優占種のタブノキは各階層に見られ、量的にも多い。タブノキ林としては安定した林と言える。

林内で見られる植物は五一種で、平坦地では多く、傾斜の急なところでは少い。

●タブノキ林階層構造（平坦部）



●タブノキ林階層構造（傾斜地）



2、タブノキ・落葉広葉樹林（タブノキ・イタヤカエデ林）

北・西側では、タブノキがイタヤカエデ・イヌシデ・カシワ・シナノキ・オオバボダイジュなどの落葉広葉樹の中に混じるように生えている。落葉樹が多くなるのは冬の季節風を強く受けることと関係すると思われる。

高木層をつくっている樹種のうち、林の全域で各階層に出現するのはタブノキとイタヤカエデである。従って、この部分はタブノキ・イタヤカエデ林としてとらえることができる。

また、イヌシデは混った風当りの弱い環境で、カシワは風当りの強い乾いた環境で優占し、それぞれタブノキ・イヌシデ林、タブノキ・カシワ林と分けることもできる。

タブノキ・イタヤカエデ林の特徴としては、落葉樹の優占度が増すことのほか、草本層でヒカゲスゲ・チゴユリ・キッコウハグマ・アキノキリンソウなどの草本植物が多くなることなどがあげられるが、全体としては草本層を代表するのはタブノキ林と同様にヤブコウジである。

(1) タブノキ・イヌシデ林

島の中央を東から西に凹んだ地形のところがあり、その上部で最もよく発達した林分が見られる。傾斜の比較的ゆるやかな湿った環境で、胸高直径35cm、高さ20mを越すイヌシデが優占種となっている林であるが、下層にはイヌシデの稚樹が全く見られない。

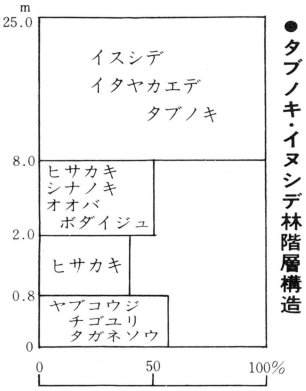
タブノキ・イタヤカエデ林の典型的な群落と見ることができる林で、この林を特徴づけるような種は特に見当らない。

イヌシデの樹高の低い林分は、人為の

影響の認められる場所に見られる。

カシワの成木はイヌシデ林内では全く見られない。たまに芽生えが見られるだけである。

●タブノキ・イヌシデ林階層構造



◀タブノキ・イヌシデ林

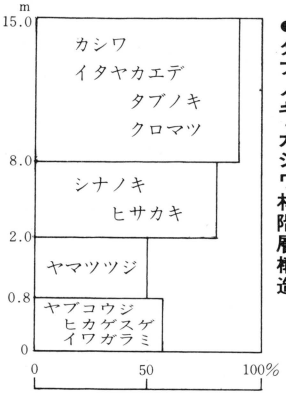
(2) タブノキ・カシワ林

タブノキ・イヌシデ林と反対に乾燥気味の環境に見られる林である。高木層をつくるカシワは胸高直径30～40cm、高さ15m前後である。

カシワとともにシナノキ・オオバボダイジュが各階層にかなりの被度で出現し、クロマツの混生も認められる。また、低木層、草本層でヤマツツジがみられ、この林を特徴づけている。

この林に出現する植物の種類数はタブノキ・イヌシデ林より多い。

●タブノキ・カシワ林階層構造



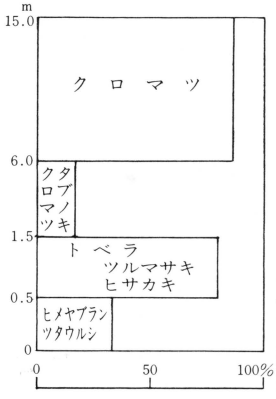
3、クロマツ林

島の周辺部にクロマツが生えているが、クロマツ林といえるのは北・西側の部分である。

クロマツは胸高35cm、高さ20m前後のものが多いが、環境によってその階層構造は一様ではない。しかし、一般に亜高木層の発達が他の林に比べて悪いのが目立つ特徴である。

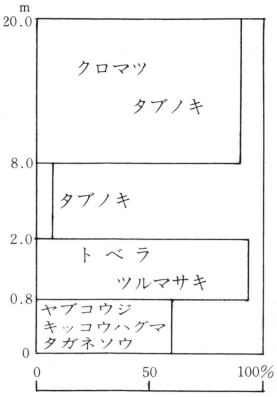
島の周辺部に見られるクロマツ林では、ヒメヤブラン・アマドコロ・スカシユリ・ハマギク・コハマギクなどが草本層に見られるのが特徴である。また、タブノキが高木層に出現することもほとんど見られず、出現する植物の種類も少ない。

●クロマツ林(クロマツ―ヒメヤブラン群落)階層構造



タブノキ・イヌシデ林の発達している谷筋の下部には、高木層にタブノキを混生するクロマツ林があり、出現する植物の種類が多く、周辺部のクロマツ林とは違った様相を示している。草本層で周辺部のクロマツ林を特徴づけているヒメヤブランなどが見られず、ヤブコウジが優占するなどのほか、タブノキ・落葉樹林と共通する種を多く持つ林である。

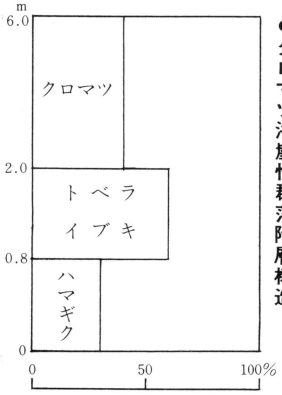
●クロマツ林(クロマツ―ヤブコウジ群落)階層構造



◀クロマツ林(1)

南側の崖地には、トベラ・イブキ・ハマギク・テリハノイバラ・スカシユリ・ハマヒナノウスツボ・ニガナ・アオツヅラフジ・キリンソウ・オニヤブソテツ・オオウシノケグサなどを下生えにしている海崖性のクロマツ群落もわずかであるが見られる。

●クロマツ海崖性群落階層構造

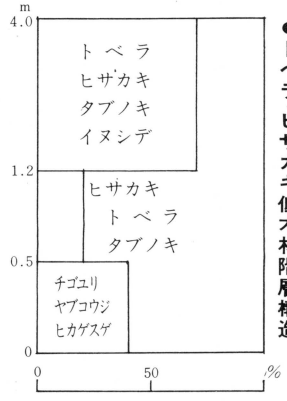


◀クロマツ林(2)

4、トベラ・ヒサカキ低木林

北西側のゆるい傾斜地に、トベラ・ヒサカキを主にした低木林があり、タブノキ・イヌシデ・クロマツ・カシワなども混じる。タブノキは低木一、二層、草本層の各層に見られ、草本層ではチゴユリ

●トベラ・ヒサカキ低木林階層構造



ヤブコウジが多い。

ところどころにタブノキの枯れた幹が残っている林で、継続して観察すれば、この島におけるタブノキ林の更新について知ることができると思われる。

5、その他の群落

弁天島では、イブキなどを主にした海崖性の低木群落や、草本だけの群落の見られる範囲はごくわずかで、島の西端部分にあるのが目立つくらいのものである。北側にある急傾斜地は未調査でもあるので、これまでに調査した資料をそのまま記録しておく。

(1)ハマギク群落

北西斜面、傾斜30度

ハマギク	5
ヒメヤブラン	2
スカシユリ	十
マルバトウキ	十

(2)ニッコウキスゲ群落

北西斜面、傾斜30度

ニッコウキスゲ	2
ハマギク	2
マルバトウキ	1
スカシユリ	1
ヒメヤブラン	1
オオウシノケグサ	1
ハマボッス	十
ジシバリ	十
コハマギク	十
アオツヅラフジ	十
クロマツ	十

(3)トベラ・イブキ群落

南西斜面、傾斜40度

トベラ	3
イブキ	2
ハマギク	2
スカシユリ	1
ハマボッス	1
ニガナ	十
ハマエノコロ	十
ハマヒナノウスツボ	十
アオツヅラフジ	十
テリハノイバラ	十

(4)キリンソウ群落

南東斜面、傾斜80度

キリンソウ	1
オニヤブソテツ	十
トベラ	十

(5)アサツキ群落

南東斜面、傾斜25度(岩のわれめ)

アサツキ	1
ハマエノコロ	十

四、まとめ

今回の調査により、弁天島の植生を

1、タブノキ林

2、タブノキ・イタヤカエデ林

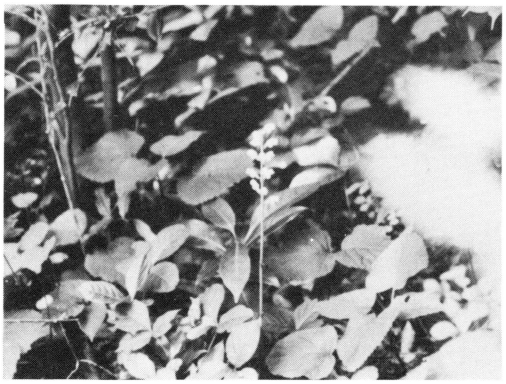
(1)タブノキ・イヌシデ林
(2)タブノキ・カシワ林　を含む

3、クロマツ林

4、トベラ・ヒサカキ低木林

等に区分することができ、それぞれの特徴を把握することができた。

弁天島から5kmほど東に位置する桂島にも暖帯林があり、タブノキージャノヒゲ群落、アカマツーヒメヤブラン群落、イブキーオオウシノケグサ群落などが認められている。**(内藤・昭五〇、五・「宮城の植物」第三号)**くわしい比較は行なっていないが、弁天島の植生とは異なるようである。



▶タブノキ林林床の様子

さらに、石巻湾内の暖帯林をくわしく調査していくことにより、当地方の暖帯的自然がより明らかになっていくと思われるが、弁天島は、その場合かけがえのない証拠を示してくれるはずである。

貴重な弁天島の自然をこれまで大切に保存してきた小竹浜地区の人々に感謝し、今後も継続して保存されるよう希望申し上げて、この報告を終ることにする。

（表1） 組　　成　　表 （1981. 7）

群落名	タブノキ林	タブノキ・落葉広葉樹林 タブノキ・イヌシデ林	タブノキ・カシワ林	クロマツ林
地形	斜面・頂上	谷・斜面	斜面	谷・斜面
方位	S・SE・NE	N W	NW・NE・SW	NW・NE・S
傾斜	0°～30°	12°～25°	20°	15°～80°
出現種数	52	38	49	53

種名	階層		階層						階層				
1. タブノキ	T_1T_2SH	5 5 5 5 5	T_1T_2SH	1	2	1	1	2	1	T_1T_2SH	2	2	1	・
2. キズタ	T_1T_2 H	1＋1＋2	T_1・・H	＋	・	・	・	＋	・	H	＋	＋	2	1
3. フジ	T_1T_2S・	2・1＋・	T_2SH	・	・	＋	1	1	＋	S・	・	・	＋	1
4. ケヤキ	T_1・SH	＋・＋＋1	S	・	＋	・	・	・	・	・	・	・	・	・
5. イタヤカエデ	T_1・SH	・1＋・＋	T_1T_2SH	4	2	3	2	3	3	・	・	・	・	・
6. シナノキ	T_1・SH	・1＋＋・	T_1T_2SH	2	・	1	1	3	3	S・	＋	・	・	・
7. オオバボダイジュ	SH	・1＋・1	T_1T_2SH	＋	3	・	・	1	＋	SH	＋	・	・	・
8. イヌシデ	SH	＋＋・＋1	T_1T_2SH	5	4	4	1	1	＋	SH	1	・	・	・
9. カシワ	SH	＋＋＋1＋	T_1T_2SH	・	＋	＋	4	3	3	SH	＋	＋	1	＋
10. スギ	・	・・・・・	T_1・・H	・	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・
11. イワガラミ	・	・・・・・	T_1・・H	・	1	・	2	・	・	H	＋	・	・	・
12. クロマツ	・	・・・・・	T_1T_2S・	・	・	・	1	2	＋	T_1T_2SH	5	5	5	5
13. トベラ	T_2SH	2 1 2 3 1	T_2SH	＋	1	＋	1	・	2	SH	5	2	4	2
14. ヒサカキ	T_2SH	・3 4 2 1	T_2SH	3	2	3	3	3	1	SH	＋	2	・	1
15. ツルマサキ	T_2SH	2 1 2 2 2	SH	・	2	＋	＋	1	＋	SH	1	2	＋	1
16. ヤブツバキ	T_2S・	・・＋1・	・	・	・	・	・	・	・	T_2S・	1	・	・	・
17. シロダモ	T_2SH	1・・＋・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
18. ユズリハ	T_2S・	・・1・1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
19. クマノミズキ	T_2・H	・・・＋＋	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
20. カヤ	T_2・・	・・・・1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
21. イヌガヤ	T_2SH	・＋1＋1	SH	＋	＋	・	・	・	・	・	・	・	・	・
22. オオバクロモジ	T_2SH	・・1＋＋	SH	＋	＋	・	＋	・	・	・	・	・	・	・
23. オオバイボタ	T_2SH	＋＋1＋＋	SH	＋	＋	・	＋	・	・	・	・	・	・	・
24. ツリバナ	T_2S・	・・＋＋＋	H	・	・	・	＋	・	・	・	・	・	・	・
25. ミツバアケビ	T_2SH	＋＋＋＋1	H	＋	＋	・	＋	・	＋	SH	＋	・	＋	・
26. ウラジロノキ	T_2SH	・・＋・・	T_2SH	・	＋	1	＋	・	・	SH	＋	・	・	・
27. カスミザクラ	SH	・・＋＋＋	T_2SH	・	＋	2	1	1	＋	S・	＋	・	・	・
28. ガマズミ	SH	＋＋・＋＋	T_2SH	・	・	1	1	1	2	SH	1	・	・	・
29. ムラサキシキブ	S・	・・＋・・	T_2S・	＋	・	1	・	＋	・	・	・	・	・	・
30. クリ	・	・・・・・	T_2・・	・	・	・	＋	・	・	・	・	・	・	・
31. ヤブムラサキ	・	・・・・・	T_2・・	・	・	・	・	＋	・	・	・	・	・	・
32. マルバアオダモ	・	・・・・・	T_2S・	・	・	・	・	・	1	SH	・	3	1	・
33. イヌザクラ	SH	＋・・＋＋	H	・	・	・	・	＋	・	・	・	・	・	・
34. ヤマウグイスカグラ	S・	・・＋＋・	S・	・	＋	・	＋	1	＋	・	・	・	・	・
35. ウワミズザクラ	SH	・・・＋＋	S・	・	＋	・	・	・	・	・	・	・	・	・
36. サンショウ	S・	・・・・＋	H	・	＋	＋	・	・	・	・	・	・	・	・
37. コマユミ	S・	・・＋・・	H	・	・	・	＋	・	・	・	・	・	・	・
38. ハナイカダ	S・	・・1・・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
39. ヤマツツジ	・	・・・・・	SH	・	・	・	2	2	2	H	1	・	・	・
40. コナラ	・	・・・・・	S・	・	・	・	・	・	＋	H	＋	・	・	・
41. コゴメウツギ	・	・・・・・	S・	・	・	・	＋	・	・	・	・	・	・	・
42. ミヤマガマズミ	・	・・・・・	S・	・	・	・	・	＋	・	・	・	・	・	・
43. ススキ	・	・・・・・	H	・	・	・	・	・	＋	SH	2	・	1	＋
44. ミズナラ	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	S・	＋	・	・	・
45. タラノキ	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	S・	＋	・	・	・
46. ナツグミ	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	S・	＋	・	・	・
47. サルトリイバラ	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	S・	＋	・	・	・
48. イブキ	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	S・	＋	2	・	・
49. イヌザンショウ	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	S・	・	＋	・	・
50. ヤブコウジ	H	2 2 4 5 1	H	2	2	1	1	3	3	H	3	・	・	・
51. リュウノヒゲ	H	＋＋＋・＋	H	＋	・	・	・	・	・	H	1	・	・	・
52. チヂミザサ	H	・・・1・	H	・	・	・	＋	・	・	H	＋	・	・	・
53. コウライテンナンショウ	H	＋＋＋＋＋	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
54. ホウノキ	H	・＋＋・・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
55. カマツカ	H	・・＋・・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
56. ツルウメモドキ	H	・・＋・・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
57. トウネズミモチ	H	・・・＋・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
58. エノキ	H	・・・＋・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
59. センニンソウ	H	・・・＋・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
60. マユミ	H	・・・・＋	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
61. アケビ	H	・・・・＋	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
62. ヤブサンザシ	H	・＋・＋・	H	・	・	・	・	＋	・	・	・	・	・	・
63. ヤマカシュウ	H	1・・・＋	H	＋	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
64. ミヤマナルコユリ	H	・・・・＋	H	・	・	・	・	＋	・	・	・	・	・	・
65. オオカモメズル	H	・・・＋・	H	・	・	・	＋	・	・	・	・	・	・	・
66. ハマカキラン	H	・・・・＋	H	＋	＋	＋	・	・	＋	・	・	・	・	・
67. ギンリョウソウ	・	・・・・・	H	・	・	・	・	＋	・	・	・	・	・	・
68. センボンヤリ	・	・・・・・	H	・	・	・	・	＋	・	・	・	・	・	・
69. ヒカゲスゲ	・	・・・・・	H	・	・	1	1	＋	2	H	1	・	・	・
70. チゴユリ	・	・・・・・	H	＋	2	・	2	・	・	H	1	・	・	・
71. キッコウハグマ	・	・・・・・	H	＋	・	＋	1	・	1	H	2	・	・	・
72. アキノキリンソウ	・	・・・・・	H	・	・	＋	＋	・	＋	H	＋	・	・	・
73. タガネソウ	・	・・・・・	H	・	・	3	・	・	・	H	2	・	・	・
74. ヤマスズメノヒエ	・	・・・・・	H	・	・	＋	1	・	・	H	＋	・	・	・
75. ヒメヤブラン	・	・・・・・	H	・	・	＋	＋	＋	・	H	・	・	2	3
76. アマドコロ	・	・・・・・	H	・	・	・	＋	・	・	H	・	＋	＋	1
77. ハマギク	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	H	・	2	・	1
78. テリハノイバラ	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	H	＋	・	＋	・
79. ヤマムグラ	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	H	＋	＋	・	・
80. ワラビ	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	H	＋	・	・	・
81. ノブドウ	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	H	＋	・	・	・
82. ニッコウキスゲ	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	H	・	＋	・	・
83. ニガナ	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	H	・	＋	・	・
84. ノイバラ	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	H	・	・	1	・
85. オオウシノケグサ	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	H	・	・	＋	・
86. ヤマカモジグサ	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	H	・	・	・	＋
87. マルバトウキ	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	H	・	・	・	＋
88. コハマギク	・	・・・・・	・	・	・	・	・	・	・	H	・	・	・	＋
89. ツタウルシ	H	＋1 2＋3	H	＋	2	3	2	2	2	H	2	・	2	3
90. スイカズラ	H	・＋・＋・	H	＋	＋	・	・	・	・	H	＋	＋	＋	・
91. ヘクソカズラ	H	・・・・＋	H	・	・	・	・	＋	・	H	＋	＋	・	・

石巻市文化財だより（第11号）
昭和55年度文化財調査特集
小竹浜地区の文化財

昭和57年３月31日印刷
昭和57年３月31日発行

発行　石巻市教育委員会
石巻市日和が丘一丁目１番１号
監修　石巻市文化財保護委員会
印刷　株式会社　松弘堂
石巻市門脇字本草園２－１６
☎（0225）㊻５５５５㈹